

委員からの主な御発言と事務局回答（概要）

※事務局で発言を要約したものであり、未定稿のため、実際の発言と異なる場合もあることに留意

- **幼児教育と小学校の連携は非常に重要だと認識する一方、5歳児の教育について、幼児期の特性を重視して議論を進めてほしい。**
 - 幼児期は五感を通じて学ぶ時期である。こうした特性を踏まえ、画一的なものではなく、各園の創意工夫が後押しされるような、子供の体験の幅を広げていくために各園が抱える課題をどう乗り越えていくかといった工夫を後押しするようなものとして議論を進めていただくことを想定している。また、全ての5歳児にということではあるが、多様性への配慮や、幼保小連携での一人一人の発達を把握した早期支援をしっかりと視野に入れ御議論いただきたい。
- **特別支援学校の小学部については含まれるのか。小学校教育との円滑な接続を考えると、障害の有無に関わらず、就学相談も検討いただきたい。**
 - 特別支援の専門家も委員として検討中。特別委員会の中だけで議論するのか、他の組織等とも連携しながら対応するのかは議論の流れによるが、特別支援教育は視野に入れながら進めていきたい。
- **保幼小の連携は、まだまだ十分ではない。委員会の議論が、今後の保幼小の接続にどのような影響を与えていくのか、イメージをお聞かせいただきたい。**
 - 幼児期に育ってほしい「10の姿」がまとめられているが、必ずしもその理解が進んでいるわけではない部分もある。どのような学びや遊びをして小学校に入るのかを幼保小がお互いに理解し、工夫を引き出すような学びについて議論いただきたい。併せて、幼児教育推進体制についても議論いただきたい。
- **早期に英語や詰込みをやるのかという不安もある。何をもって質の高い教育を早期に提供するのかについて、幅広い議論ができる委員を選んでほしい。**
 - 幼児期の教育の特性に理解を有するメンバーとなる見込みであり、いわゆる早期教育を推進する議論にはならない。幼児期の五感を通じた体験を重視した学びを、小学校における生活科を中心とした学びにどうつないでいくか、どう理解を深めていくかをご議論いただけるメンバーとなる見込み。
- **幼保と小学校の質的に違った教育をつなげるときに、双方の理解が薄いのが現状。制度だけが押し下げられることを危惧している。**
 - 非常に長い間議論されてきたテーマである。幼児教育と小学校以降の教育は、その違いと連続性を意識しながら、幼児教育と小学校教育双方の関係者の協力により、具体的な工夫を引き出す方策をまとめていけるよう、事務局としても工夫していきたい。
- **中学校、高校もつなげて18年教育に取り組む県もある。資質・能力の考え方などを軸に、中高でも、幼児教育の在り方のようなことも一緒に学んでいけると良い。**
- **小学校側の課題として、幼児期に育まれた資質・能力を認識せず、1年生が0からのスタートになっている傾向や型にはまった指導を行う傾向が指摘されている。幼児教育側の課題として、環境や遊びを通じた保育が後手に回っていることが指摘されている。また、両者とも「10の姿」が到達目標でないことへの理解が薄い。行政についても、幼児教育、保育内容の質的向上の一体的取組に向けた専門職の配置・参画が急務で、教育委員会と関係部局が本気になって連携していくことが不可欠。**
- **様々な施設類型から小学校に入ってくることを考慮し、施設を越えて共有できる指針を作ってほしい。また、幼稚園教諭と保育士が共通認識を図れるような研修が必要。配慮が必要な子供に適切に対応できるよう5歳児健診の活用を。また、子供がデバイスを用いることの影響を保護者にも共有することが必要。**